

歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文*)

L'interrogation en français

vue sous l'angle de la typologie linguistique historique

今田 良信

IMADA Yoshinobu

0. はじめに

本稿の目的は、現代フランス語および古フランス語の疑問文の作り方を概観した上で、「歴史言語類型論」的視点から見て、両者の間に変化の跡が見られるのか見られないのか、また、見られるとすれば、それはどのような変化の傾向であるのかを考察してみることである。「歴史言語類型論」とは、筆者の造語で、共時的研究の枠組みである言語類型論に、時間の経過に伴う言語変化の様相をも加え、通時的視点を融合させた新しい言語分析の枠組みである。文法範疇や文法事項に関する基準（類型論上のパラメータ）について、同一言語内のかなり時間的隔たりを持った2つの共時態（体系）間で変化の様相を観察し、その結果を2つ（以上）の言語間で比べてみれば興味深いのではないかとの着想から出発したものである。さらに、言語構造上の変化（変換）の型によって諸言語を類型化できないかという構想も持っている。そして、この作業を2つ（以上）の言語間で行い、その結果を比べてみれば、「歴史対照言語学」とか、さらに調査言語数を増やし、変換の型による類型化ができれば、「歴史言語類型論」とでも呼べるような研究領域を展開させることもできるのではないかと考えている。従って、疑問文という項目についてのみ扱うのなら、この術語を使わず、単に通時的視点としても差し支えはないが、筆者は、本稿で扱うパラメータの項目も上述の構想の枠内で捉えているので、この術語を用いることにする。

1. 今田(2009)について

上述の着想を初めて実際に試みた今田(2009)では、フランス語をモデルとして、古フランス語(842年～13世紀末頃)と現代フランス語(凡そ第1次世界大戦(1914～1918年)以後)間には、どのような文法範疇や文法事項のパラメータの中に、どのような変化が見られるのか、或いは見られないのか、また、見られるとすれば、それはどのような種類の、どの程度の開きを持った変化であるのかを、便宜的に次の3つの判断基準で調べてみた。¹⁾

◎印：巨視的にも微視的にも概ね共通すると判断される場合

○印：巨視的には共通すると見なされるが微視的には相違する事例が散見される場合

●印：巨視的にも（従って微視的にも）異なると判断される場合

今田(2009)では、安藤(1987)と古浦(2008)を参考にして25項目のパラメータを立てた。そのうち本稿に関わるのは、以下の2項目である（各項目の頭の番号は、今田(2009)で25項目中の何番目であるかを示すもの）。

17. 疑問文が何でマークされるか。

20. 疑問詞が文頭に置かれるかどうか。

17. は、疑問文の作り方、20. は、疑問文における疑問詞の位置に関するものである。当然ながら、前者は、全体疑問文(interrogative totale) [=oui-non 疑問文] と部分疑問文(interrogative partielle) [=疑問詞疑問文] の両方に、後者は、部分疑問文だけに関わる問題である。得られた結果は次の通りであった。²⁾

17. ●古フランス語では疑問文は倒置によってマークされるのが通例であるが、現代フランス語では(1)音調（文尾を上げる） [=抑揚]、(2)文頭のest-ce que、(3)倒置のいずれかによってマークされる。

20. ○古フランス語では疑問詞は文頭に置かれるのが基本であるが、現代フランス語では必ずしも文頭に置かれるとは限らない。

以上のことを踏まえた上で、2. では、現代フランス語の全体疑問文と部分疑問文を、3. では、古フランス語の全体疑問文と部分疑問文をさらに詳しく見てゆきたい。

2. 現代フランス語の疑問文

2. 1. 全体疑問文

これは、文全体を対象とする疑問文であり、以下の3つのタイプが見られる。

①平叙疑問タイプ [cf. 石野(2008), p.27] : 平叙文の文尾を上げる音調 (=抑揚) によって表現される。

(1)Vous parlez français? (NHK(1985/10), p.60)

②Est-ce que疑問タイプ [cf. 石野(2008), p.27] : 文頭にEst-ce que(qu') をつけることによって表現される。抑揚は文尾を上げなくても良い。

(2)Est-ce que vous parlez français? (NHK(1985/10), p.60)

③倒置疑問タイプ [cf. 石野(2008), p.27] : 主語と動詞を倒置して表現される。

(3)Parlez-vous français? (NHK(1985/10), p.60)

主語が名詞の場合、代名詞で受けなおしてから倒置（複合倒置）する。また、動詞の3人称単数形が母音字で終わる場合は、il, elle, onとの間に発音を整えるため -t- を挿入しリエゾンする。

(4) Jean parle-t-il français? (NHK(1985/10), p.60)

口語では, ①, ②をよく使い, ③は少し堅く, 改まった感じで, 書きことば中心の表現とされる。

2. 2. 部分疑問文

文の要素のうちの1つを対象とする疑問文で, 以下の4つのタイプが見られる。用いられている記号は, S : 主語, V : 動詞, K : 疑問詞を示す。

①平叙疑問タイプ: S + V + K ?

疑問詞の抑揚を上げて発音する [cf. Roberge, 他(2002), p.885]。

(5) Ton cousin habite où? (大木, 他(2009), p.74)

(6) Elle s'appelle comment? (NHK(1985/10), p.19)

(7) Vous avez quel âge? (NHK(1985/10), p.29)

(8) Vous êtes en France depuis combien de temps? (NHK(1985/10), p.35)

(9) Vous avez quelle heure? (NHK(1989/10), p.53)

②強調疑問タイプ (est-ce qui/est-ce que(qu'))疑問タイプ) : K + est-ce qui/ est-ce que (qu') + S + V ... ?

抑揚は文尾を上げない。

(10) Qui est-ce qui chante? (石野(2008), p.35)

(11) Qu'est-ce qui arrive? (同上) [この意味で①, ③の言い方はなし(同上)]

(12) Qui est ce que tu aimes? (同上) [①Tu aimes qui?, ③Qui aimes-tu?(同上)]

名詞主語の場合, Qui est-ce que Paul aime? (同上)

[この「ポールは誰を好きなんだろう」の意味で, ①Paul aime qui?, ③Qui Paul aime-t-il?。③で単純倒置は不可*Qui aime Paul?(同上)。但し, 「誰がポールを好きなんだろう」の意味ならQui aime Paul?で可(Roberge, 他(2002), p.885)。]

(13) Qu'est-ce qu'il mange? (同上) [①Il mange quoi?, ③Que mange-t-il? (同上)] 名詞主語の場合, Qu'est-ce que Paul mange? (同上)

[この「ポールは何を食べるんだらう」の意味で, ①Paul mange quoi?, ③Que mange Paul?。③で複合倒置は不可*Que Paul mange-t-il? (Roberge, 他(2002), p.885)。]

(14) Où est-ce que ton cousin habite? (大木, 他(2009), p.74)

(15) Pourquoi est-ce que Marie pleure? (Roberge, 他(2002), p.886)

③倒置疑問タイプ: K + V + S ... ?

抑揚は文尾を上げてても上げなくても良い。

(16) Que mange-t-il? (大木, 他(2009), p. 35)

(17) Où habitez-vous? (石野(2008), p. 36)

(18) Pourquoi Marie pleure-t-elle? (Roberge, 他(2002), p. 886)

(19) Quand la guerre finira-t-elle? (篠田, 他(1974), p. 422)

但し、主語が名詞の場合でも、複合倒置にしないこともある。すなわち、直接目的補語の que, 属詞の qui, que, quel の後は単純倒置のみである。où, quand の場合は、単純倒置でも複合倒置でも良いが、pourquoi の場合は、複合倒置 [= (18)] のみ [cf. *Pourquoi pleure Marie? (Roberge, 他(2002), p. 886)]。なお、(15)も参照のこと。

(20) Que mange Paul? (大木, 他(2009), p. 35)

[cf. *Que Paul mange-t-il? (Roberge, 他(2002), p. 885)]

(21) Qui est cette dame, là-bas? (Roberge, 他(2002), p. 885)

[cf. *Qui cette dame est-t-elle? (同上)。属詞の que, quel の例は省略。]

(22) Où est la gare? (石野(2008), p. 36)

(23) Où habite ton cousin? (大木, 他(2009), p. 74)

(24) Quand finira la guerre? (篠田, 他(1974), p. 422) [cf. (19)]

④ 間接疑問タイプ: K + S + V...?

石野(2008), p. 37によれば、「疑問副詞の文頭構文では、倒置を行わないことがある」と述べられている。Roberge, 他(2002), p. 886 には、「Pourquoiのあとのest-ce que は省略されることが多い」とあるが、combien, comment, oùでも同様な言い方があることは、下記に挙げた用例の通り。文頭の疑問詞の抑揚は上げてよいが、文尾の抑揚は上げない。

(25) Combien ça coûte? (石野(2008), p. 37)

(26) Comment il s'appelle? (NHK(1991/10), p. 25)

(27) Où ton cousin habite? (大木, 他(2009), p. 74)

(28) Pourquoi Marie pleure? (Roberge, 他(2002), p. 886)

以上のうち、③は改まった言い方で、書きことばでよく用いられ、②は口語で用いられ、①と④は口語の中でもくだけた言い方になると指摘されている。

3. 古フランス語の疑問文

Hasenohr(1993²), p. 238では、疑問文全般について、次のように述べられている。

「…1. 名詞主語あるいは代名詞主語を倒置するのが、全体〔疑問文(補足筆者)〕であれ部分〔疑問文(同上)〕であれ、直接疑問では原則である。」

また、Foulet(1980³), pp. 232-233 では、

「古フランス語では、疑問は、それが声の抑揚の中にはっきりと含意されない場合、今日でもそうであるように、動詞と主語の位置転換〔=倒置（補足筆者）〕によって表現される。…（中略）…文が疑問詞で始まる場合も同じ文構造が現れる。」

とされている。古フランス語の疑問文については、文法書等に述べられている範囲でしか判断はできないが、それも書きことばに限られ、話しことばについては、抑揚等に関する当時の状況の復元が不可能である以上、その殆どが不明である。テキストの直接話法の部分を参考にはできても、その出典の（写本の）成立年代の問題や、韻文であれば、韻律などの作詩上の制約の問題も出て来て、散文であっても、抑揚等については定かではない。従って、Fouletの「それが声の抑揚の中にはっきりと含意されない場合」という但し書きも、現代語の倒置疑問文と頻度上同程度に抑揚による平叙疑問文が当時存在していたことを指摘するものにはならない。逆に、少なくとも筆者の知る限り、そのような事例は殆ど見られないに近い。そこで、古フランス語において、ある文が疑問文であるか否かの判断は、Hasenohrに代表されるように、現時点では、倒置や何であれ他の目に見えるマークによって判断せざるを得ないのである。

以下、現代フランス語で見られた疑問文のタイプに合わせて、古フランス語ではどうなっているかを見てゆくことにする。

3. 1. 全体疑問文

①平叙疑問タイプ：不使用？

このタイプは、その使用が未だ明確でないので、一応「不使用」として疑問符を付しておくことにする。これだと、Fouletとそれほどには変わらないとも言えようが、倒置していない文を疑問文とするのが難しいように、倒置していない疑問文が百パーセント無かったとすることはさらに難しいのである。

②Est-ce que疑問タイプ：不使用

このタイプは、①と異なり、有れば見て分かるものであるが、存在したという記述は、これまでのところ見られず、筆者もテキスト中に確認はできていない。

③倒置疑問タイプ：使用（原則）

(29)Est che bien fait? Ferai je plus? (Hasenohr(1993²), p. 238)

「事はうまく運んでいますか。もっと私がやりましょうか。」（訳文筆者）

Foulet(1980³), p. 232によれば、現代語とは異なり、「13世紀の言語は、いわゆる語調のためのtを知らない」とあり、Ménard(1988³), pp. 105-106には、「語調のためのtは中世語では使われない。16世紀になってようやく現れる。古フランス語では

疑問文にも肯定文にも見られない：Pense il que n'en ait pechié? 「あの方はご自分が過ちを犯していないとお考えなのですか。」（訳文筆者）“Pense-t-il qu'il n'a pas tort?”（現代語訳）／Et encor en parole on. 「人はまだ今でもその噂をしている」（訳文筆者）“Aussi en parle-t-on encore maintenant.”（現代語訳）」と述べられている。

また、Foulet(1980³), p. 233によれば、現代語なら複合倒置を行う場合でも、古フランス語は「この〔動詞と主語の倒置という（補足筆者）〕規則に例外を設けないという点で現代語よりも首尾一貫している。…（中略）…：Est morte m'amie? 「我が愛するお方は亡くなったのですか」（訳文筆者）／Dit chius moines ke ...? 「その修道僧は～と言ったのですか」（訳文筆者）」とも述べられている。

3. 2. 部分疑問文

①平叙疑問タイプ：不使用

このタイプに言及した記述は、筆者の知る限りではあるが、全く存在しない。

②強調疑問タイプ：使用（まれ）

Hasenohr(1993²), p. 112によれば、「現代語の疑問の迂言法“Qui est-ce qui”, “Qu'est-ce que” は〔古フランス語では（補足筆者）〕まれである。この用法は強調を示しているように見える：Qui est qui se demante si? 「そのように悲嘆に暮れているのは一体誰なのですか」（訳文筆者）／Sire qu'est ce ke vos me dites? 「貴方様は一体何を仰っているのですか」（訳文筆者）」と指摘されているが、前者の例に見られるように、正確に現代語通りというわけではないことが分かる。

③倒置疑問タイプ：使用（原則）

(30) Comment a ele a non?(Foulet(1980³), p. 232)

「彼女は何という名前ですか」（訳文筆者）

(31) Quant fust avenus chis affaires?(Foulet(1980³), p. 233)

「この事はいつ起こったのですか」（訳文筆者）

なお、部分疑問文の場合、現代語でも、名詞主語でありながら複合倒置をせず、古フランス語と同じく単純倒置の事例があることは、すでに2. 2. ③で述べた通りである。

④間接疑問タイプ：不使用（基本的に）

このタイプも、間接疑問の語順とされるものであり、Hasenohr(1993²), p. 238によれば、「〔直接疑問とは（補足筆者）〕反対に、間接疑問においては、〔名詞主語あるいは代名詞主語の（同上）〕倒置は通常生じない。」とされている。ただし、

Ménard(1988³), p. 316には, ②の強調疑問タイプとも少し関わるように見えるが, 「直接疑問が主語の倒置なしで作られることもあり得る. Que ce est que vos volez faire? 「あなたは一体何をしたいのですか」(訳文筆者)」として, このタイプと見られる事例が1例だけ挙げられている。

4. 古フランス語と現代フランス語における疑問文の作り方のまとめ

〔表1〕タイプごとに見た古フランス語と現代フランス語の疑問文

		《古フランス語》	《現代フランス語》
全 体 疑 問 文	①平叙疑問タイプ	不使用?	→使用(口語)
	②Est-ce queタイプ	不使用	→使用(口語)
	③倒置疑問タイプ	使用(原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用(書きことば中心) 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置〕
部 分 疑 問 文	①平叙疑問タイプ	不使用	→使用(くだけた口語)
	②強調疑問タイプ	使用(まれ)	→使用(口語)
	③倒置疑問タイプ	使用(原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用(書きことば中心) 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置およ び単純倒置もあり〕
	④間接疑問タイプ	不使用(基本的に)	→使用(くだけた口語)

2. および3. において, フランス語の2つの体系における疑問文について概観してきたが, Ménard(1988³), p. 105によれば, 次のような指摘がなされている。

「現代の話しことばは, 疑問文においては主語を次第に動詞の前に置こうとする傾向がある(Est-il venu?がしばしばEst-ce qu'il est venu?に取って代わられる)のに対し, 古フランス語では, 全体疑問において, また非主語の疑問詞で始まる部分疑問においても, 名詞主語あるいは代名詞主語を倒置するのが原則である。」

Ménardの指摘は一応妥当なように思われるが, Est-il venu?(全体疑問文③タイプ)からEst-ce qu'il est venu?(全体疑問文②タイプ)へという疑問タイプの違う事例を直接結

びつけるのは、あまり適切でないように思われる。なぜなら、これら2つのタイプは、概念的意味は同じであっても、周辺の意味(=連想的意味)のうちの1つである文体的意味が異なっているので、この2つを比べるのなら、Est-il venu?と抑揚のみによる疑問文Il est venu?(全体疑問文①タイプ)の関係も問題にする必要が出てきて、比べる2つの対象間に(1)主語と動詞による語順の違いだけでなく、(2)文体や言語使用のレベルの違い(すなわち、くだけたレベル:改まったレベル、話しことば:書きことば)の問題も同時に含まれてくるからである。そこで、言語使用のレベルの違いも考慮しながら、2., 3. で詳細に観察してきた疑問文の作り方のタイプごとに、古フランス語と現代フランス語を比べてみれば、両体系間における変化の一定の方向性がよりくっきりと見えてくるのではないかと考え、まとめとして、一覧表にしたのが〔表1〕である。

5. フランス語における疑問文の構造の変換

最後に、フランス語の疑問文においてどのような言語構造上の変化(変換)があったのかを、〔表1〕から分析してみたい。

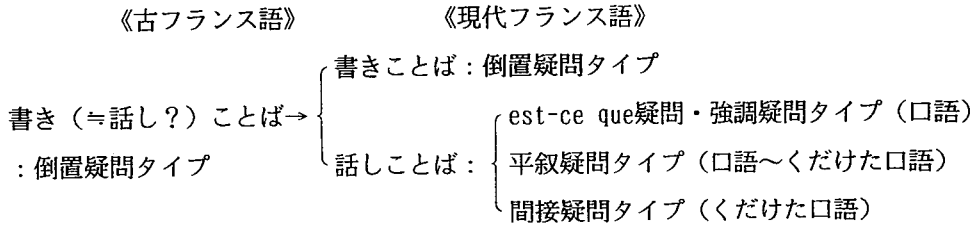
(1)主語と動詞による語順の違いの面からの分析

通時的に見ると、古フランス語に比べて現代フランス語は、全体疑問文と部分疑問文の両方において、文頭にせよ、文中にせよ、文尾にせよ、SVを定置化したまま(=倒置せずに)疑問文を作るという傾向を強くしていることが見て取れる。そして、このことは、今田(2002c), pp. i-iiの「この語順変化(SVC, CVS⇒SVC, CSV〔補足筆者〕)は、古フランス語から現代フランス語への体系の変化全体として捉えれば、動詞第2位の語順から、Vidos(1965)が指摘しているように動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を有するようになった人称代名詞のSの働きをもその中に担う、SVが定置化された語順への動きと見ることもできよう。」という指摘とも矛盾無く合致していると言えよう。

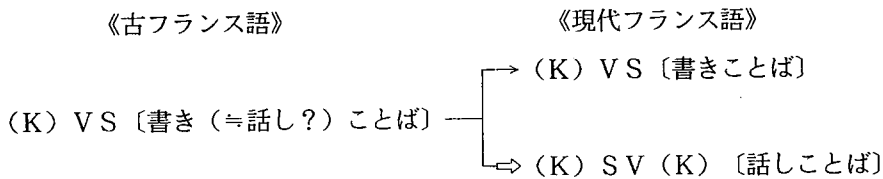
(2)文体や言語使用のレベルの違いの面からの分析

古フランス語においては、文法書等の記述の範囲で見ると、倒置疑問タイプが原則で、それ以外のタイプはほとんど未発達であり、結果として、話しことばと書きことばの両方が形式的に未分化であったと言えよう。一方、現代フランス語に至るまでに、倒置疑問タイプの他に3つの新しいタイプが発達してきたが、そのことが、話しことばと書きことばの間に形式的な分化の傾向を生み出し、書きことばは倒置疑問タイプ、話しことばはそれ以外のタイプ(est-ce que疑問・強調疑問タイプ、平叙疑問タイプ、間接疑問タイプ)というような、タイプによる役割分担が生じてきているという状況が見られる。図示すると、

次の通りである。



さらに、最終的に、(1)と(2)を統合して、全体疑問も部分疑問も区別せず、主語と動詞の語順、疑問詞の位置、話しことばと書きことばの区別のみを単純化して、フランス語における疑問文の構造上の変換を図示すれば次のようになろう。なお、()は、疑問詞について、有無(=部分疑問か全体疑問か)の選択、および二者間(= (K) SV (K) の2つのK)の択一(文頭に来るか文末に来るか)を示し、⇔は、新たな発展を表わす。



注

*本稿は、日本ロマンス語学会第47回大会(北海道大学, 2009年5月30日)における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1)巨視的(視点)と微視的(視点)とは、同一言語内の2共時態を観察する際の「言語を捉える上での大きな網目」と「言語を捉える上での小さな網目」のことで、詳しくは、今田(2010a), pp. 31-32 を参照のこと。

2)パラメータ項目の●か○かの判断について、詳しくは今田(2009)を参照のこと。

参考資料

NHK(1985/10):『NHKラジオ フランス語講座』1985年10月号, 日本放送出版協会.
 NHK(1989/10):『NHKラジオ フランス語講座』1989年10月号, 日本放送出版協会.
 NHK(1990/10):『NHKラジオ フランス語講座』1990年10月号, 日本放送出版協会.
 NHK(1991/10):『NHKラジオ フランス語講座』1991年10月号, 日本放送出版協会.

参考文献

- 朝倉季雄(2002) (木下光一校閲) : 『新フランス文法事典』, 白水社.
- 安藤貞雄(1987) : 『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 — 』, 大修館書店.
- 石野好一(2008) : 『フランス語—文法からコミュニケーションへ—』, 弘学社.
- 今田良信(2002c) : 『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 — 』, 溪水社.
- 今田良信(2009) : 「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a) : 「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から — 」, 『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 大木充, 他(2009) : 『パス・パルトゥ』, 駿河台出版社.
- 倉方秀憲, 他(2000) : 『プチ・ロワイヤル仏和辞典〔改訂新版〕』, 旺文社
- 古浦敏生(2008) : 『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- 佐藤房吉, 他(1963) : 『フランス文法小辞典』, 駿河台出版社.
- 佐藤房吉, 他(1991) : 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 篠田俊蔵, 他(1974) : 『基準ふらんす文典』, 第三書房.
- 島岡茂(1982) : 『古フランス語文法』, 大学書林.
- 鈴木信太郎, 他(1992) : 『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店.
- Roberge, Cl., 他(2002) : 『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 — 』, 駿河台出版社.
- Foulet, L. (1980³) : *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993²) : *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Marchello-Nizia, Ch. (1999) : *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1988³) : *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Bière.
- Raynaud de Lage, G. (1975) : *Introduction à l'ancien français*, 9^e éd. revue et corrigée, Paris: SEDES. [大高順雄訳編『古フランス語入門』, 朝日出版社, 1981]
- Vidos, B. E. (1959) : *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.
- Yaguello, M. (2003) : *Le grand livre de la langue française*, Paris, SEUIL, pp.11-90. (Marchello-Nizia, Ch.: *Le français dans l'histoire*)